18　　分相応の暮らし　　　　　　文法　助動詞③　たり・り

読解　作者の考えをつかむ

おほかた、この所に住みはじめし時は、あからさまと思ひしかども、今すでに、を経たり。仮のも、ややふるさととなりて、軒に朽ち葉ふかく、にむせり。おのづから、ことの㋐便りに都を聞けば、この山にこもり居て後、①やむごとなき人のかくれへるもあまた聞こゆ。まして、その数ならぬたぐひ、尽くして②これを知るべからず。たびたび炎上にほろびⓐたる家、また、いくそばくぞ。ただ仮の庵のみのどけくしておそれなし。ほどしといへども、夜ふすあり、昼居る座あり。一身をやどすに不足なし。は、小さき貝を好む。これ、身知れⓑるによりてなり。みさごはに居る。すなはち、人をおそるるが㋑ゆゑなり。われまた、かくのごとし。身を知り、世を知れⓒれば、願はず、わしらず、ただ静かなるを望みとし、憂へなきを楽しみとす。

語注

寄居＝ヤドカリのこと。

みさご＝鳥の名。海や川の近くにすむ。

基本古語

のどけし（形ク）＝穏やかだ。のんびりしている。

【原文】

　おほかた、この所に住みはじめし時は、あからさまと思ひしかども、今すでに、五年を経たり。仮の庵も、ややふるさととなりて、軒に朽ち葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから、ことの便りに都を聞けば、この山にこもり居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞こゆ。まして、その数ならぬたぐひ、尽くしてこれを知るべからず。たびたび炎上にほろびたる家、また、いくそばくぞ。ただ仮の庵のみのどけくしておそれなし。ほど狭しといへども、夜ふす床あり、昼居る座あり。一身をやどすに不足なし。寄居は、小さき貝を好む。これ、身知れるによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち、人をおそるるがゆゑなり。われまた、かくのごとし。身を知り、世を知れれば、願はず、わしらず、ただ静かなるを望みとし、憂へなきを楽しみとす。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

この［　　　　　　］に住み始めて、気づくと五年が過ぎている。［　　　　］や［　　　　　　］のように［　　　］の程を知り、［　　　］の無常を知っているので、ただ心が［　　　　］なことを望み、［　　　　］のないことを［　　　　　　］とする。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。〈3点×2〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕

㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ～ⓒの助動詞の文法的意味と活用形を答えよ。〈3点×3〉

ⓐ〔　　　　〕〔　　　　形〕

ⓑ〔　　　　〕〔　　　　形〕

ⓒ〔　　　　〕〔　　　　形〕

問四　［チェック問題］助動詞③　たり・り

(1)　 次の活用表を完成させよ。〈1点×2〉

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| り | たり |  |
|  |  | 未然形 |
|  |  | 連用形 |
|  |  | 終止形 |
|  |  | 連体形 |
|  |  | 已然形 |
|  |  | 命令形 |
| ※特殊 |  | 接続 |

※　「り」の接続…（　　　　）型活用語の（　　　　　　）及び、（　　　　）型活用語の（　　　　　　　　　　　　）。

(2)　 次の傍線部の文法的意味と活用形を答えよ。〈2点×2〉

1　年ごろ労せる父母に、…（宇津保物語）

2　つねよりももの思ひたるさまなり。（竹取物語）

1〔　　　　〕〔　　　　形〕

2〔　　　　〕〔　　　　形〕

問五　傍線部①を現代語訳せよ。〈8点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②「これ」の示す内容を、解答欄に合うように二十五字以内で答えよ。〈15点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕ということ。

問七　作者の考えと合致するものを一つ選べ。〈6点〉

ア　人里から離れたことで世情に疎くなったので、たまには山中の庵から出てみたい。

イ　家が焼けてしまうことを心配して、人里から離れた暮らしをしている。

ウ　ゆったりと生きていたいので、今の狭い庵での生活に不満を持っている。

エ　身の程を知り、世間の恐ろしさを理解して、山間の小さな庵に住んでいる。

〔　　　〕

【解答】

問一　仮の庵／寄居／みさご／身／世／静か／憂へ／楽しみ

問二　㋐＝ついで　㋑＝理由〈3点×2〉

問三　ⓐ＝完了・連体形　ⓑ＝存続・連体形　ⓒ＝存続・已然形〈3点×3〉

問四　(1)〈1点×2〉

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| り | たり |  |
| ら | たら | 未然形 |
| り | たり | 連用形 |
| り | たり | 終止形 |
| る | たる | 連体形 |
| れ | たれ | 已然形 |
| れ | たれ | 命令形 |
| ※特殊 | 連用形 | 接続 |

※「り」の接続…（　サ変　）型活用語の（　未然形　）及び、（　四段　）型活用語の（　已然形・命令形　）。

(2)　1＝完了（存続）・連体形　2＝存続・連体形〈2点×2〉

問五　高貴な人がお亡くなりになった〈8点〉

問六　とるに足りない身分の者がどれくらい亡くなったか（ということ。）（23字）〈15点〉

問七　エ〈6点〉

【現代語訳】

そもそも、この場所に住み始めた頃は、ほんの少しの間と思っ（てい）たのだが、すぐにもう、五年が経過した。仮の庵（と思っていたもの）も、次第に馴染みのある場所となって、軒には朽ち葉が深く（積もり）、庵の土台には苔が生えている。自然と、何かのついでに都の様子を聞くと、この山にこもって住んでのち、高貴な方がお亡くなりになったことも数多く耳に入る。ましてや、そのとるに足りない身分の者たち（のことは）、もれなくこれを知ることができない。何度も炎上して無くなった家は、また、どれほど（多い）か。ただ（こういう）仮の庵ばかりが何事もなく安心だ。（部屋の）程度は狭いといっても、夜には眠る床があり、昼には座る場所がある。一人の身が住まうことに足りないものはない。ヤドカリは、小さな貝を好む。これは、身（の大きさ）を知っているからである。みさごは荒磯に住む。つまり、人を恐れるというのが理由である。わたしもまた、これと同じである。自分の身の程を知り、世情を知っているので、（大それた）願いは持たず、慌て騒がず、ただ（心身が）静かであることを（唯一の）望みとし、悩みのないことを楽しみとする（のだ）。

【補充問題】

問１　「寄居」（６行目）、「みさご」（７行目）の喩えを用いて作者は何を言おうとしているか。最も適当なものを選べ。

ア　過度の望みをすて、分相応の暮らしを送りたい。

イ　人里離れた厳しい環境に身を置き、仏道修行に専念したい。

ウ　人はお互いに助け合って生きていくべきである。

エ　住み慣れた場所に身を置くからこそ落ち着いた生活が送れる。

問２　「かくのごとし」（７～８行目）とはどういうことか。簡潔に答えよ。

【補充問題解答】

問１　ア

問２　寄居やみさごのように身の程や世情を知っているということ。